

2 1 世紀の日本のかたち（3 4）

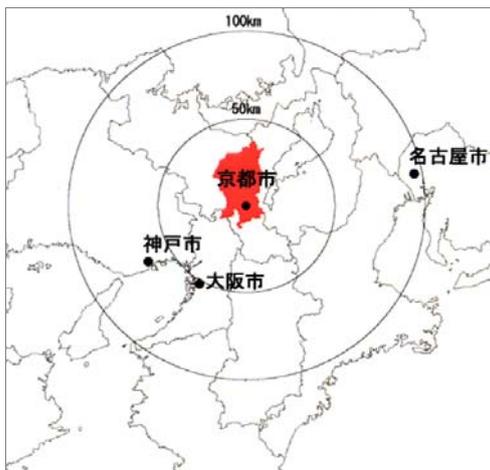
随想 - 千年の首都、平安京・京都



戸沼 幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

盆地景の平安京

今年には平城京遷都1300年に当たり、奈良ではこの一年間を通して盛大な祭りが行われています。日本古代の首都移転を追って、平城京・奈良に次いで、9月中旬の週末、平安京・京都に出かけました。



京都市の位置

(人口:146万人 面積:828km² 資料:京都市(2010. 8))

七代70余年続いた平城京は、784（延暦3）年に廃都され、長岡京を経て794（延暦13）年、桓武天皇によって平安京に遷都されました。

平安京・京都は、1869（明治2）年東京に遷都されるまで千年の間、日本の首都であり続けたのです。

古代における短期間での幾度もめまぐるしい遷都は古代王朝政権の基盤の不安定さを物語っ

ていますが、平安京に至ってようやく不動の地を得、新しい展開をすることになりました。

日本古代の首都設計は、平城京、平安京も唐の都城、長安などを模したものでした。北に天子の座を置き、一辺4～5km程度の方形に領域を囲い込むといったものです。

そして、天子の座を囲む方形の都のプランを納める場所は「四神相応^{しじんそうおう}」の場所でなければならぬのでした。概していえば、三方が山に囲まれ、南に平地のある盆地が求められています。平城京の奈良盆地に対して、平安京は京都盆地です。

古代日本の首都移転はいわゆる畿内の範囲ですが、琵琶湖に近づくように北上しています。畿内の北に、より適切な四神相応の地があったということになります。

四神相応の四神とは、青龍（東）、白虎（西）、朱雀-鳳凰（南）、玄武-亀と蛇の合体（北）であり、いずれも生命力の強い動物に姿を借りて表現されています。この中で南の方角に当たる朱雀には華やかさを感じます。

京都盆地は北山、東山、西山、そして南に水（^お巨椋池^{ぐらいけ}）と、四神に支えられているという見立てができます。三方が山に囲まれていることは防衛上も有利です。四神相応の地理として北は丘、東は流水、西は大道、南は低地・池というとらえ方

もなされています。

平安京の位置はその統治すべき国家領域、
ごきしちどう
五畿七道へつながる道の結節点にあたりました。北は大原を越え若狭に、東は北陸道、東山道、東海道、西は丹波から山陰道へ、南は水路または陸路で山陽道、西海道、南海道につながります。

そして、これまで以上に統治領域が拡大され、より大勢の人が集まる首都空間としての十分な平地と豊かな水（緑）が求められました。この点で鴨川、桂川があり、そして琵琶湖に近い平安京は地下水が豊かです。

京都という呼び名は、平安後期には一般名詞であったものが固有名詞化したとのことですが、平安京・京都市は環境容量の大きい地理地形を得て、独特な盆地景として、千年の日本の都の姿形を創り続けたのです。

平安京の設計

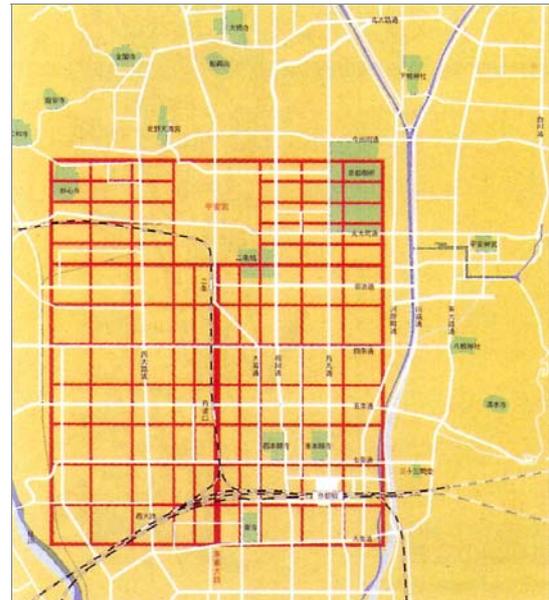
平安京の初期設計の図面を見ると、船岡山（標高112m）を背にして、大内裏（大極殿のある平安宮）を置き、ここから西南に緩やかな斜面敷地をそのままに、真南に直線を中心軸、朱雀大路（幅84m）を設定し、この軸の東西に左京・右京を振り分け、東西南北の格子型の街路を組み上げています。当初想定した都市の領域は桂川と鴨川に挟まれた東西4.5km、南北5.2km（面積23.4km²）です。ここに、宮処、公家、二官八省の官吏、住民の居住地、東市、西市など、道具立ては平城京と同じです。

ただ、平城京に比較して異なるのは、寺院が少なく、東寺と西寺の二寺のみです。これは平城京において寺院の勢力が巨大になり、これを断ち切るための平安京遷都であったという説が頷けます。

平安京に寺院が入ってくるのは10世紀末以降で、政権の権威付けのためというよりも、変動の激しい

時代状況の中で、庶民、住民、人間の心の拠り所、信仰の空間として出現したことでした。

平安京の地形は、敷地全体が西南に緩く傾斜しており、右京は湿地帯で人々の住むための条件が悪く、住いをはじめ、主たる都市機能は鴨川寄りの左京でなされたようです。



平安京と現在の京都の重ね合わせ

（資料：「京都の景観」京都市都市計画局都市景観部景観政策課 発行・編集、平成21年2月発行）

平安京の建築は火に弱い木造でしたから、しばしば火災にあっています。首都の中心である大内裏も焼け落ちては場所を移しました。

先日、元の大内裏跡を訪ねてみましたが、すっかり一般の市街地となり、小公園の一角に「大極殿遺跡」という石碑があるのみでした。朱雀門、朱雀大路も現代の自動車時代の市街地となり、かつての面影を見いだすことが難しいのですが、平安京の南の入口「羅城門」に至っては小公園の一角のコンクリートの棒杭にその名が書かれているだけで、やっとその位置を知るといった具合でした。

ただ、この標識の隣の街区に古色を漂わせた五重塔を持つ東寺がしっかりと現存し、南の領域の境界、九条大路の位置を教えてくれるのは、今に

残る千年の都、平安京の姿を探る者にとってはうれしいことでした。



大極殿跡



羅城門跡



夕映えの東寺

京都御所

平安京の大内裏（宮城）は残された記録によると、東西1.2km、南北1.4kmのゆったりとした敷地

に、宮殿造りの堂々たる構えをもったものでした。



京都御所と京都御苑の航空写真

（資料：「京都市の景観政策－時を超え光り輝く京都の景観づくり」京都市作成（平成19年9月～）

ただ当初の大内裏は天徳4（960）年9月以来幾度も焼失し、平安末期にはあまり利用されなくなりました。代わって里内裏（一時的皇居）の一つであった現在の京都御所が、光厳天皇が即位した1331（元弘元）年以来、明治に至るまでの500年にわたり、皇居、天皇制政治の中心になりました。



京都御所（承明門からの紫宸殿）

（資料：「京都散策ガイド（<http://goryo12.hp.infoseek.co.jp>）」

現在の京都御所は1855（安政2）年に再建されたものだということです。今回、宮内庁京都事務所に申し込んで、庭と外観のみでしたが見学の機会を得ました。朱色の承明門越しに、古代から連続と続いた天皇制の政治を飲み込んだ左右対称の紫宸殿をしばし眺めたことでした。

日本の政治史は長大な天皇制を時間軸として展開してきましたが、京都はその起点、拠点であり、「天皇制」そのものが歴史遺産とも思うのです。

二条城、武士と京都

京都御所の見学の後、世界遺産ともなっている二条城を見学しました。外国人客も含めて観光客で一杯でした。徳川家康は天皇の任命した征夷大將軍、臣下ですが、堀と石垣に天守をもつ二条城は、いかにも家康の造った城で、雅な京風への挑戦にも思えました。

洛中洛外図屏風に画かれた五層の天守閣を持った家康の城は將軍の威風を京において天下に示している図です。平安京以来、京都は政治的に中世近世を通して、王朝（天皇）権力と武家権力のせめぎ合いの舞台でした。江戸に本拠を置いた家康にして、実務的に京都は西国大名の押さえに必要な拠点であったにしても、天下統一の実力者は天下を納得させる「権威」を必要としたのです。

京都の雅の中で、二条城の内部は四季の花鳥草木や力強い虎などを写しとった障壁画が一杯に描かれておりましたが、宮に対する武の対抗心を表したとも感じました。しかし皮肉なことに、江戸幕府が大政奉還を上奏し、日本の政治の舞台回しが行われたのはこの二条城です。

日本の中心的政治権力の所在地として天皇の御所であった平安京・京都は全国制覇を目指す武家集団にとって実質的にも権威づけとしても重要な空間でした。鎌倉に初めて幕府を開いた源頼朝も征夷大將軍であり、京都の六波羅に探題を置いて関係を保ちました。織田信長は室町に全国制覇の旗印として旧二条城を1569（永祿12）年に構えました。

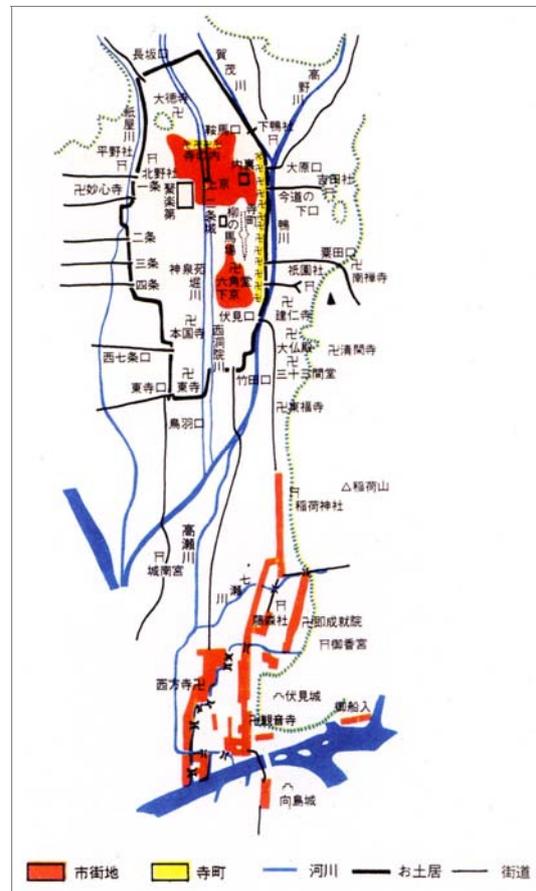
豊臣秀吉に至っては1587（天正15）年、大内裏跡地に豪壮な「聚樂第」を築き、安土桃山文化の華を咲かせました。秀吉は築城計画、都市計画に優れた才能を持っており、左京の人口密集地に^{おどい}御土居（壁）を巡らし、鴨川の洪水を防ぎ、公家、

武士、町民の住み分け、身分制度に基づく城下町的土地利用計画も行っております。

また、京都の大味な格子型街区に背割を入れて小街区をつくり、町人の住みやすい都市づくりをしているのです。

京都は時代を映し込んでゆきました。

江戸時代、朝廷、公家、武家階級の間に町人、商人、手工業者の台頭があり、京都には町共同体が生まれて行きます。京都の「町家」は、賑わいと奥行きのある独特な京都の景観となっております。



近世初期の京都

（資料：「京都の景観」京都市都市計画局都市景観部景観政策課 発行・編集 平成21年2月発行）

近世、臨海部に立地した江戸と大坂は、人や物の交通、流通に優位な位置を占め、大都市に成長して行きますが、内陸部にありながら京都はこれ

に匹敵する大都市であり続けました。これは内陸として特段に交通の便に恵まれ、また京都盆地が平安京十萬都市から数十萬の京都へと成長したのは、大きな環境容量を持った土地柄だったからです。明治になっての琵琶湖からの疎水も近代都市京都の拡大、成長を助けています。

平安京の都市づくりで面白いのは、当初の4km×5km角の平安京の領域内で様々な変化を許容しつつ動的平衡を続ける一方、洛外、領域外に、いわば四神の地に、寺社や離宮を点在させていったことです。私も過日、桂離宮、修学院離宮やいくつかの寺社を訪れましたが、四季の自然のままに、庭と建築が一体に在る空間、山と川を借景しつつ息づいている歴史遺産に見入りました。唐風の四神が日本の神仏に置き換わってゆくのです。

四神相応の京都景観計画

京都市は1967（昭和42）年、奈良、鎌倉と共に古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（古都保存法）によりいち早く歴史的風土特別保存地区を指定しています。また、1972（昭和47）年、全国に先駆けて市街地景観条例を制定しました。そして今度、2007（平成19）年9月、思い切った高さ規制を含む新景観政策を策定、実施しております。

京都の景観づくり、都市計画に深く関わってこられた長年の友人、三村浩史さん（京都大学名誉教授、京都市景観まちづくりセンター理事長）に連れられて、京都市の景観づくり担当職員の方々に話を聞く機会を持つことができました。

なにしろ京都市では都市計画局に都市景観部があり、100人近いスタッフを擁し、先進的景観づくりに力を入れているのです。

京都市の新景観政策<時を超え光り輝く京都の景観づくり>5つの基本方針として、

- ①「盆地景」を基本に自然と共生する景観形成
- ②伝統文化の継承と新たな創造との調和を基本とする景観形成
- ③「京らしさ」を活かした個性ある多様な空間から構成される景観形成
- ④都市の活力を生み出す景観形成
- ⑤行政、市民、事業者等のパートナーシップによる景観形成

を掲げています。

盆地景とは、東、西、北、三方の山々（東山、西山、北山）に囲まれた京都の地形であり、南北に鴨川、桂川という二本の川が流れている千年の風景、自然景観です。まさに四神相応の景観を持続しようということであり、現代においてもここに京都都市景観づくりの明らかな基盤を置いているのです。

和風を生み出した伝統文化も「京らしさ」もこの四神相応のこの盆地での、地人相関の生み出したものに違いありません。「新たな創造」も「都市活力」も平安以来千年の都の流れに沿ったものと思われます。



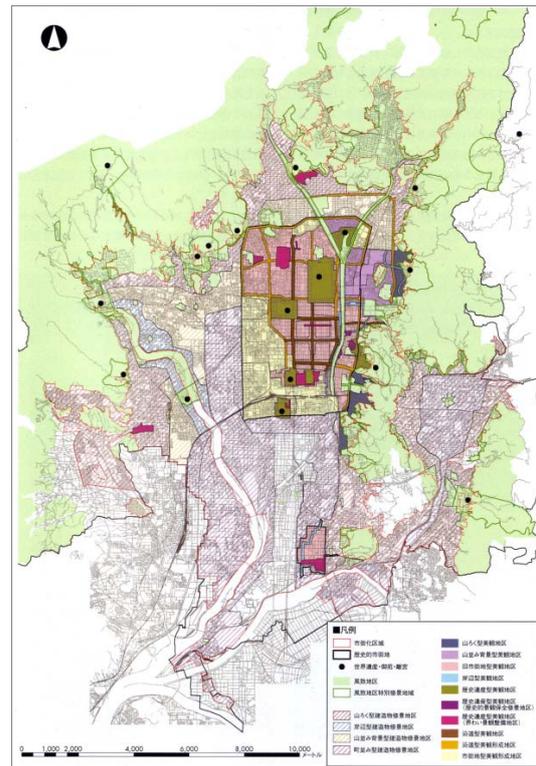
地域類型図

（資料：「京都の景観」京都市、平成21年2月）

京都は年間5,000万人をこえて観光客が入り込み、賑わっております。

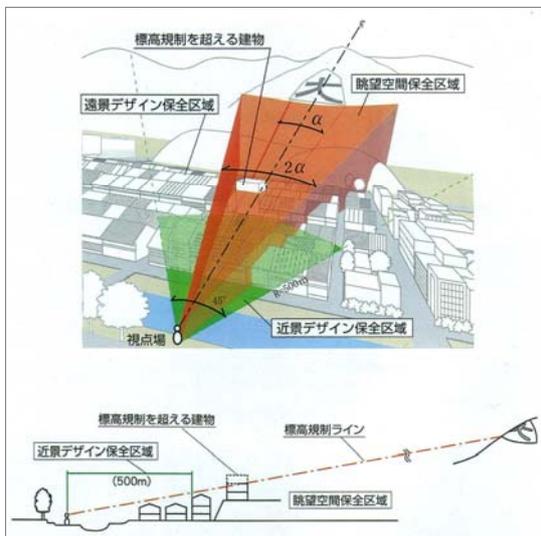
新京都市景観政策で注目されるのは徹底した高さ規制です。歴史的市街地、山裾の住宅地、工業地域などで、高度地区による高さの最高限度を引き下げ、10m、12m、15m、20m、25m、31mの6段階に抑えているのです。31m（百尺）とは古都の五重塔の高さです。賀茂川右岸から大文字の山への眺望が遮られないように建築物等の最高部を規制しています。また歴史的な市街地のほぼ全域で、建物の高さを引き下げました。京町家と調和するヒューマンスケール（人間尺度）の都市空間を目指すとしています。

三村さんと三条、四条通りの京町家が連なる地区を歩き、時に町家に入り込んで「これは市民とのパートナーシップを必要とする事業だ」「東山を見ると京都に居ると感じますね」などとあれこれ景観談義に花を咲かせました。



美観地区等に関する指定概要図

(資料：「美観地区、美観形成地区及び建築物修景地区に関する指定概要図」)



眺望景観保全地域の指定

(資料：「京都の景観」京都市、平成21年2月)

注：文中に掲載の写真は戸沼撮影

(2010. 10. 15)